

16. 被害地の早期再生手法の開発

(1) シカ食害跡地へのオオバアサガラとアセビの導入試験

亀谷行雄

〔目的〕

野生獣類による森林被害、特にシカによる食害が顕在化して、被害地の増加が大きな問題になっている。シカ食害地に自生し、食害に強く、食害されても枯損しないオオバアサガラとアセビを活用した被害跡地の効果的な早期緑化方法を見いだす。

〔方法〕

オオバアサガラ植栽試験は、2003年5月にオオバアサガラ1年生実生苗16本、挿し木苗7本、併せて23本を奥多摩地域の被害跡地に植栽した。植栽地は、傾斜度は、30度程あって常に土壌が移動している状況である。

アセビ挿し木試験は、2003年5月にオオバアサガラを植栽したのと同じ地域で、挿し穂の長さ20cm、挿し付け本数80本を直接現地に挿し付けを行った。その後、2003年9月に2樹種の活着状況を調査した。アセビは、根を掘り起こして発根の有無を確認した。また、急傾斜地など、直接に播種のできない被害跡地にオオバアサガラを導入するため種子を活用した試験を試みた。この試験は、2003年5月にオオバアサガラの種子(写真-1)を市販されている発芽床の中に播いて、その発芽床を当場の苗畑に置いて発芽の状況を調査した。

〔結果〕

オオバアサガラの植栽地およびアセビの挿し木試験地の全景を写真-2に示した。オオバアサガラの植栽試験では、1年生実生苗は、16株中、14株が活着し、挿し木苗は7株中5株が活着し、合計で23株植栽したうちの4株が枯損して、19株が活着した。オオバアサガラの活着率は82%であった(表-1)。写真-3に活着したオオバアサガラの状況を示した。

アセビの挿し木試験は、80本挿し木をしたうち発根したものは、55本であった。発根率は、68%であった(表-2)。写真-4に活着したアセビを、写真-5に掘り起こして、発根している状態のアセビを示した。発根は、挿し穂の切り口とその上部の2段に分かれていた。切り口の部分からの発根は、丸くかたまっているのに対して上部からの発根は、ながくひげ根の状態であった。

オオバアサガラの実生苗と挿し木苗を植栽する方法およびアセビを挿し木する方法の違いによる生存率は、図-1のとおりである。

以上から、植栽・挿し木が直接できる被害跡地への導入方法は、オオバアサガラの実生苗、挿し木苗の植栽およびアセビの挿し木が有効であることが明らかとなった。発芽床を使った試験では発芽床からのオオバアサガラの発芽は、見られなかった。これは、発芽床が地上に置かれているために種子が乾燥してしまい発芽できなくなったものと思われる。

今後、直接に植栽や挿し木ができない急傾斜地の被害跡地で活用できる緑化方法を検討する必要がある。



写真 - 1 オオバアサガラの種子



写真 - 2 植栽および挿し木試験地

表 - 1 オオバアサガラの活着状況

	植栽本数	活着本数	活着率
	本	本	%
挿し木苗	7	5	71
1年生実生苗	16	14	87
合計	23	19	82

表 - 2 アセビの発根率

挿し木本数	発根本数	発根率
	本	%
80	55	68

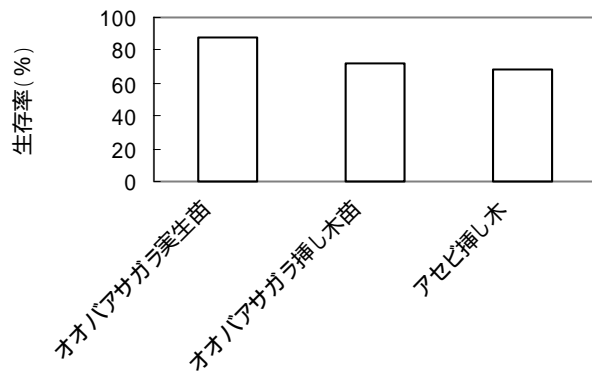


図 - 1 オオバアサガラとアセビの生存率



写真 - 3 試験地で活着したオオバアサガラ



写真 - 4 試験地で活着したアセビ



写真 - 5 発根したアセビ